倫風宏話

理想と実践

上廣榮治

「実践倫理はたしかなものよ、遣ただけしか分かりゃせぬ」、先師がよく唄っていた自作の都々逸です。言うまでもなく、「遣る」とは「実践する」という意味です。実践もせずに、倫理を理解したつもりになることを戒めているのです。

たしかに私たちは身体で実践してはじめて真の理解に達します。自転車の乗り方を理屈で理解したからといって、自転車に乗れるわけではないのと同じです。実践してこその理論であり理解なのです。

この実践で何よりも大切なことは、それを継続するということです。何事であれ、目標に向かって努力し続ければ、いつかは必ずそこに到達するのが道理だからです。「継続こそ才能に勝る」といったのは、アメリカの大統領カルビン・クーリッジでした。

「継続は力なり」という言葉もあります。大正から昭和の初めにかけて活躍した宗教家、住岡夜晃の「青年よ強くなれ」という詩の一節です。広島県の山村で生まれた彼は、小学校の教員を九年間勤めた後、親鸞の教えを人々に広めるために、その後の生涯を捧げた人です。

――青年よ強くなれ／牛のごとく、象のごとく、強くなれ／真に強いとは、一道を生きぬくことである／性格の弱さ悲しむなかれ／性格の強さ必ずしも誇るに足らず／「念願は人格を決定す　継続は力なり」／真の強さは正しい念願を貫くにある／怒って腕力をふるうがごときは弱者の至れるものである／悪友の誘惑によって堕落するがごときは弱者の標本である／青年よ強くなれ　大きくなれ（住岡夜晃著『讃嘆の詩』より）――

青年に呼びかけている詩ですが、世代を超えて励ましとなる詩でもあります。一つの道を堂々と貫き通して生きること、それが本当の強さだというのです。

この詩を読むと、我が会の「朝の誓」にある「人の悪をいわず　己の善を語りません」「腹を立てず　不足の思いをいたしません」「三つの無駄を排し　新しく大地に生き貫きます」という条々（じょうじょう）に、ぴたりと呼応していることが感じ取れます。

詩の中で住岡師は、「真の強さは正しい念願を貫くにある」といっています。正しい目標を掲げてこそ、実践は継続できるし、真の強さも獲得できるということでしょう。

正しい目標とは、我が会でいえば、「倫理社会の創建」であり、「我も人もの仕合わせ」であり、「共生の理想」です。正しい理想を目指してこそ、実践努力を継続する力が湧いてくるのです。

たとえば、マラソン選手は四二・一九五キロ先のゴールを目指して、ひた走ります。やがて、息が切れ、足が悲鳴を上げます。もう走るのを止めたいという誘惑にかられます。それでも走り続けるのは、完走したときの達成感を思うからであり、自分を支え応援してくれている人たちの顔が思い浮かぶからです。まさに「我も人もの仕合わせ」を願うからです。

ところで、「眼高手低（がんこうしゅてい）」という四字熟語をご存じでしょうか。辞書には、「目は肥えているけれど、実際の

技能が未熟であること」と解説されています。知識があって何かと批評ばかりするが実行が伴わない人や、理想が高いわりには実践力が不足である状態を指す言葉です。

しかし、四年前にノーベル物理学賞を受賞した益川敏英博士は、この言葉を「目標は高く、実践は基礎から着実に」という意味に解釈します。博士は、学問研究には「眼高手低」の精神が必要だとして、常日頃、学生や若い研究者に「目標は高くもて。しかし、研究は基礎から着実に下から積み上げることが大切だ」と助言します。これは、高い目標を実現するには基礎が大切であるということと、基礎がしっかりしていれば応用がきくということの、二つの意味を含んでいるようです。

博士は講演で、このことを説明するとき、しばしば『昆虫記』で有名なファーブルと細菌学者のパスツールのエピソードを紹介します。二人は十九世紀のフランスの、ほぼ同世代の科学者です。

あるとき、フランス南部のアヴィニョン地方の、ファーブルが住む村の桑畑で、桑の葉にタバコモザイク病が発生し、養蚕業に大打撃を与えました。ファーブルは昆虫学者ですから蚕の生態についてはよく知っていましたが、タバコモザイク病には、どう対処したらよいのかわかりません。

政府は、重要な輸出産業である養蚕業を救うため、パスツールを団長とする対策団を派遣しました。彼は乳酸菌などを発見し、食物の発酵や腐敗は微生物（細菌）によって起こることを明らかにして、細菌学を確立した学者です。ところが、パスツールは蚕や繭というものを見たことさえなかったのです。

養蚕については素人のパスツールが来ることを知ったファーブルは驚きました。それで彼は、助言を求めるパスツールに誠実に応えました。手に取った繭を耳元で振ったパスツールから、「音がしますね。何が入っているのですか」と尋ねられたファーブルは、繭の中には蛹が入っていること、繭は蛹を保護するために蚕が編んだものであることなどを一からパスツールに教えました。

結局、この感染病が細菌によるものだと見抜いたパスツールは、免疫学的な手法を用いてこれを撲滅(ぼくめつ)することができたのでした。養蚕に無知だったパスツールでしたが、病気が細菌の伝染によって蔓延(まんえん)するという基礎的な原理、つまり伝染病の本質を知っていたので、見事に対処できたのです。

益川博士は、このエピソードを紹介した後、「科学というものが人の役に立つようになるためには、基礎的であればあるほどよい。広範囲に応用がきくからです」と述べるのでした。

さて、私たちも同様です。朝起きと「朝の誓」という基礎的な実践を着実に継続することで、それぞれの家庭や職場で広く応用がきくという事実。そのことは、皆さんも経験的に実感されていると思います。

言うまでもなく、私たちの理想は万人が共生して仕合わせな社会を実現することです。「我も人もの仕合わせ」を目指して、周りの人の幸福のために力を尽くし、そのことによって自分も幸福になる。自分の幸福が家族、隣人、職場へと及んでいく。そのような、幸福の連鎖と循環と増幅こそが、私たちの実践がもたらす社会的な意味なのです。

その基礎が、朝起きと「朝の誓」の実践です。そうした「今日一日」を継続し積み重ねることが、すべての実践の基礎なのです。高い理想を見据え、その理想に向かう中継点として時々の目標を定め、ひたすら歩み続けます。基礎的な実践の上に、時々の課題に応じた実践を展開するのです。

しかし、基礎的な実践も応用的な実践も、「家庭愛和」も「自然との共生」も、すべてはつながっていて、ひとつです。なぜなら、すべての実践は「我も人もの仕合わせ」に向かう実践であるからです。

倫理は実践に始まり、終わりということがありません。私たちの目は高い理想を見つめています。基本の実践を継続することで、時々の課題に立ち向かい、さらなる高次の実践に臨みます。一歩一歩着実に、悠々と力強く、日々新しく大地に生き貫きましょう。